

# 暗闇の中の笑顔

●阿佐谷南一丁目

長谷川 米造

(明治三八年生まれ)

戦争体験の思い出というのに、この表題に何を？——。と、思われるだろう。

私は戦争の末期は深川木場の三ツ目通りに住み、近くの木材統制会社の航空軍需課に勤め、各産地の出荷督励に出張し、時には軍需省に向き、打ち合せなどしていた。

昭和二〇年三月九日夜も、木場ビル内の会社で防護団員として、空襲のいや増す暗い電灯の下で、今夜は来るらしいと雑談していた。

突如ラジオの「房総沿岸からB29が帝都を襲うべく、接近」との報に「総員家庭に戻り待機してくれ」と言われ、自宅に戻った。

遙か西方の都心には既に火炎が中空を焦がしていた。「ただいま」と言って帰ると女房は安心した面持で出迎え、

「今夜はこちらに来るらしいので、避難の準備をしました」という。

見れば、一〇歳の長男はもう防空頭巾を被って私を出迎えた。この子は敷矢小学校から集団疎開のはずだったが、私た

ちの郷里が埼玉だったので、一五日には女房・子供をそこに疎開させようと考えた。たまたま近くまで行く牛車があつて、一週間ほど前に荷物はそれにのせて送ってあつた。

生まれて半年の次男がいた。この子が生まれる時は、女房が自宅で産気づいたのだが、産院では受け入れられなかった。医者を呼んだが、あい憎空襲警報で待機ということまで来てくられず、隣家のN夫人が来て子供をとりあげてくれた。

警報下なので、幼児を床下に作った防空壕に入れようとすると、「何をするの、縁起でもない」と、ひどく叱られたことを覚えていいる。

北方本所方面に焼夷弾攻撃が始まり、火の手が空を焦がした。「直ぐ後から追いつくから、先に埋立地に逃げろ」と、女房にいった。

私の家は三ツ目通りを五〇メートルほど入った、木堀に面した静かな所だった。次男を背負った女房は、長男を連れて出て行く。「お父さんも早くおいで」と、暗闇の中でも火炎の光で照らされた笑顔で手を振りつつ出て行く。

この暗がりの別れが永久の別れになろうとは、神仏にも分からなかつたろう。

近くに火の手が上つたので、我が家に別れを告げ家族の後を追って、埋立地に急いだ。

煙に追われて埋立地に来てみると、親は子を子は親を呼び合い、阿鼻叫喚とはこれをいうのだった。

その夜は騒然とした芝生の上で、眠れぬまま一夜を過ごし、辺りが明るくなると、隈なく家族を探したが見つからず、焼けたであろう自宅に戻り待とうとした。

思い出など何も残っておらず、燃えるに任せたので煙をあげて燃えてしまっている。私は荷物を下ろし腰を下ろした。

荷物の中には僅かの食品が入っていたが「お父さんも無事だった」と、長男が今にも戻って笑顔を見せると思い、出して食べるのを止めた。

二時間ほど無為に待っていると、裏の製材工場の舎宅にいた主人が前を通り「皆さん無事で」と、足をとめて聞く。私がかこうこうだと話すと「表の交差点で、二人の巡査が、埋立地に行く人に向かって『東陽公園の方に逃げて』といって手を振っていたそうだと、話してくれた。

その人も家族が不明なので、連れ立って探しに行く。公園は市電の終点の先だった。

いたいた。焼跡の中に男女の区別のつかぬ黒こげの全裸の死体が、累々と数知れずある。髪はなく僅かに乳房で女性と分かり、子供を抱えた死体に近寄ったがどれも違う。

誰かが「お巡りさんも死んでいる」という。見れば傍らにサーベルがあった。

日暮れになったので、もう一度自宅跡に戻り紙片に「赤坂に來い」と表示し、背負った食料を出し初めて口にした。

赤坂見附に姉が酒屋をやっていた。あるいはどこも焼けたかと思つたが、焼けた街中を歩き続け姉に会って、家族の事情を話すと、姉はうつむいたまま無言でいつまでも顔をあげなかつた。

その夜は手厚い歓待を受け、初めて暖かいふとんに入り、明日は郷里に報告に行こうと思ひながら、いつしか眠っていた。

その後、統制会社は日本橋の城東小学校を借りて復活し、赤坂から通勤したが、又々五月二五日夜の空襲で焼け出され一人石神井の社宅に移り、戦後はいやな思い出の地には行かないと、新生の地を杉並に構えた。

それから今日までの四十数年、妻子の亡骸はどこか分からず、長男は学校の成績が良かったので、生命あれば社会に出で中堅として、活躍したであろうと思う。

それよりも私の臉に今も生きているのは、空襲の夜半火災に照らされた女房が「お父さんも早くおいで」と、防空頭巾の中からほほ笑み、手を振ったあの夜のことである。

# 東京下町大空襲

● 本天沼一丁目  
早田 好子

(昭和五年生まれ)

私、昭和二〇年三月一〇日戦争の犠牲者の一人として体験を書かせて頂きます。

昭和二〇年三月九日未明の東京下町大空襲を思い出しました。私の一家は浅草猿若町、隅田公園のそばで、父は男子服仕立業をやっておりました。家族は四男、二女、父母の八人家族です。私が一五歳の時、長男の兄は出征兵として満州へ、二男、三男の兄は工場で寮生活しておりました。弟は小学五年生で学童疎開で宮城県に行き、父母、妹、私は家に残り、私は工場へ行き、一家ばらばらの生活でお国のためと一生懸命でした。くる日もくる日も脅えた落ちつかない毎日でした。

三月九日夜半、警戒警報発令。それから二時間半の後には東京下町の四割が焼け出され、ざっと八万の人々の生命が奪われました。浅草、本所、深川、城東の四区はほとんど全滅に近い大被害を受けました。私の家では、弟が一年間の疎開生活を終え「六年生の卒業式のため、一〇日昼に上野駅に着く」との学校からの知らせを受けて、九日の夜は嬉しさを胸にだき床に就きました。一〇時三〇分ごろ烈しいサイレンの

鳴り響く音で目が覚め、警戒警報発令を知り、私たちはいつもの習慣で防空頭巾をかぶり、床下の防空壕に入るなり、父は防火のため外へ飛び出していきましたが、直ぐ家にもどり「今日は大変だぞ。いつもと違うぞ。B29がやって来るぞ。

北風も強く吹くし、立っていられないぞ」と言っていました。その時、今度は空襲警報発令、「それ来たぞ」と思った矢先、もう外は昼間のような明るさでした。「大変だ大変だ大変だ」と近所の人々の狼たえる声、防火訓練もやくにたらず、皆我先に避難しました。人々は無我夢中で逃げました。私たち一家も逃げ遅れては命が無いと思い、一目散に皆の後ろについて逃げました。人々の考えは皆同じで、水のある所なら安心と思ひ隅田川方面へ行けば、言問橋の上は動きがとれず、公園の中は満員でした。人また人、荷物は一ぱいで足許は見えず、人々におされながら言問橋をわたり、牛島神社の方面へ逃げました。

そのうち人々はざわめき出し、「雨だ雨だ雨だよ雨が降って来たよ」と言っております。上を見上げると頭から頬につた

わり、雨だと思いました。でも「おかしいね。いやなおいがするよ」と騒ぎ出しました。「石油だ。ガソリンだ」、皆の声は爆音に消され、言葉になりませんでした。ガソリンを空からまかれ、焼夷弾を落下され、逃げ場を失っている時、廻りの人々の背中のリュックサックやらフトン、荷物、防火頭巾、着物など炎が真赤に夜空高く広がりはじめ、顔・手足は火傷し我慢出来ずに橋の上からザブンザブンと次から次に飛び込む人、血の足跡を残し行先で倒れている人、身が焦げ始める人、子どもを抱えて倒れている人、親を無くし、子供を無くして食べるものは無し、着る物、家を無くしてまた一家全滅、一夜にして金持ちも貧乏人も同じ丸裸になりました。私たち一家もばらばらでした。着の身着のまま目は煙で赤くはれ、足は疲れて動かず一夜を明かしました。無我夢中で逃げた道をさまよい、私たち一家が皆無事を確認した時は、抱き合ってなきました。

夜が明けて、一番おどろいた事は、言問橋の上は死体の山、川の中も死体、ロウ人形のような山、男女の区別が出来ず、いろいろの焦げたにおいがして目を背けなくては見られない残酷さ、罪のない老人、子供、一般市民まで巻き添えにして、ガソリンをまき、大量の人々を焼き殺してしまう戦争は、二度と繰り返してはならないと思います。私たちは八月一五日より三月九日未明の出来事は忘れません。父の妹は隅田川の中で死にました。弟は卒業式も出来ず、今だに卒業証書はもらってありません。父母はもういませんが、私たち兄妹は六

人皆五〇代、六〇代で元気ががんばっております。

今日の日本は平和でありがたいです。日本国又は全世界の人々が戦争を知らない人になるよう、平和のため友好のため日々お力を入れている人々に感謝しつつ筆をおさめます。



# 戦争に明け暮れた女学生時代

●荻窪一丁目

広瀬 芳子

(昭和二年生まれ)

昭和一六年四月、旧制高等女学校へ入学した私は、この年の一二月八日に太平洋戦争が始まり、卒業の年の八月一五日に戦争が終わりました。いわば私の女学生時代というものはまったく戦時下にあったわけです。

英語は敵国語ということで全面廃止され、体育の授業は武道に変わり、天道流といういかめしい長刀なぎなたを振るう時間となりました。

物資不足、食糧難の時代が続くなか、「欲しがりません、勝つまでは」をモットーに校庭を開墾して、さつま芋を作った日々。授業返上で防空壕を掘った日々： 戦局はますます悪化し、学徒勤労動員令に靴もなく、下駄ばきで工場へ通勤し、無我夢中、必死で働いたものです。戦後四六年の星霜が流れ、いたましい戦争の傷痕は歲月がもたらす風化とともに、歴史の外へ葬られようとしています。

戦争を知らない戦後世代の数は、国民の過半数に達し「戦争」という過ちを二度と繰り返さないために、私は戦下に追われた日のことを書きます。

昭和二〇年、旧制高等女学校四年生だった私は、本所横網町の親戚の家に寄宿していた。戦局の激化とともに学校も非常時体制に入り、軍の下請工場と変転した教室で、授業返上の軍需生産に励むようになった。上級生の三、四年生は学徒勤労動員として、直接軍需工場へ駆り出され、私たちは吉祥寺にあった株式会社日本無線という工場で、海軍の送信機や受信機を組立てる仕事に従事した。

国から支給された国防色の上着とズボンに身を固め、日の丸に「神風」と染め抜いた鉢巻を、おさげ髪にりりしく結び緊張した毎日に疲れも忘れ「撃ちてし止まん！ 一億総決起！」の旗じるしの下に雄々しく立働いた。

B 29の爆撃はもちろん、艦載機の来襲を浴び、近くの牟礼山へ避難する途中、心臓を打ち抜かれる思いも何度か受けた。直撃弾を受けて死亡された先生もあった。戦場は日本全国土に広がり、B 29の来襲が日に日に激化し今日ありて、明日を憂うれう師や友の生命となった。三月九日、その夜伯母は一人娘の疎開先へ出向き、こと珍しく留守であった。

「今夜はB29の大編隊がやって来そうな予感がするね。みかんが手に入ったから、おあがり。」と言って差出してくれた。当時としては、貴重なみかんを食べて床に就いたのは一瞬近かった。毎晩のように空襲警報が発令され、着のみ着のまま仮眠する状態であった。国防色の上着には、いつ、どこで死んでも身元確認ができるように、学校名、学年、氏名、血液型が胸に張付けてある。

うとうとと寝もやらぬうち警戒警報が発令され、伯父とともに飼犬を抱いて防空壕へ避難したのも束の間、「敵機来襲!! 敵機来襲!!」ブーン、ブーンと鈍い爆音が近づいてきたかと思うと、頭上から所かまわずバラバラと落下された焼夷弾は、たちどころに炸裂し、壕から脱出した瞬間、もはや周囲は火の海と化していた。玄関からめらめらと立上る火の手に砂袋を必死にかけたものの、四方八方から、すさまじい勢いで炎上する火災の中を、風下へ向かって逃げまどう群衆に右往左往し「おじちゃん、おじちゃん!!」と夢中で叫んだが、どうするすべもなく人波に押し流された。

五〇メートルほど風下へ来たとき「私にもしもの事があつたら、家宝のこの刀だけはきつと持ち出してくれ」と言っていた伯父の言葉を思い出し、逃げまどう人々を掻き分け無我夢中、壕の中から刀をしかと握り、避難する群衆の波に交って区立二葉国民学校まで来てしまった。「開けてくれ」「開けてくれ!!」鉄筋校舎に下ろされた扉を割れんばかりに叩き、怒号を発しても、先入者たちの固く閉ざした手は決して緩めては

くれなかつた。

逃げ場を失った人びとの群れは、また風下へ風下へ徒党を組んで流れた。私はとつきに震災記念堂の広場を思い立ち、人垣から離れ、ただ一人風上へ向かった。

荒れ狂う火の粉を打ち払い、もみ消し、ゴウゴウと燃えさぶ石原町へ出た。そしてやっとたどり着いた境内の大樹の根本で恐怖におののいていた。広場の中には不思議なほど人影はまばらであった。関東大震災のとき、何万という人命を奪ったというこの地に、下町の人たちは言い知れぬ縁起をかついだのだろうか。きな臭い防空頭巾をかぶって、うずくまっていた矢先、またも雨あられのように投下する焼夷弾に記念堂も遂に炎上し、私は生きた心地もなく這うようにして安田庭園へ難を逃がれた。蔵前から飛んでくるすさまじい火の粉と熱風にあおられ、いたたまれず強制疎開された隅田川の淵へ出て川の水を頭からかぶり、恐怖におびえる一夜を過ごした。夜が白々と明けたころ、ようやく爆撃の音も鎮まり、私ははぐれてしまった伯父の姿を探し求めて同愛病院から石原町、横網町一帯を一人さまよい歩いた。

蔵前橋から見た隅田川には、熱気に耐え切れず飛び込んだ人たちが無残な姿で浮き、流され、石原町交差点付近の道端には、逃げ遅れた人々が折り重なるように焼死し、目を覆いたくなる惨たんたる有様だった。二葉国民学校へ避難した大勢の人たちも煙に包囲され全滅した。私は運命の奇跡を身にひしひしと感じながら、高いエントツと黒焦げの木立を残す



彼等は外力を恃んで、對する種族の激進なる異質を以て、世界平和の基調に挑戦し來り、支那事變の發生を見るに至りたるが、御稜威の下、皇軍の向ふ所敵なく、既に支那は、重要地點悉く我手に歸し、同躰其眼の十國民政府を更新して帝國は之と善隣の誼を結び、友好列國の國民政府を承認するもの已に十一箇國の多きに及び、今や重慶政權は、奥地に殘存して無益の抗戦を續くに過ぎず、然れども英米兩國は東亞を永久に隸屬的地位に置かんとする頑迷なる態度を改むるを欲せず、百方支那事變の收結を妨げし、更に關印を使喚し、佛印を脅威し、帝國と乘國との親交を裂かむがため、策動至らざるなし、仍ち帝國と之等兩方諸邦との間に共榮の關係を増進せむとする自然的要求を阻害するに事日なし、その状態も帝國を敵視し帝國に對する計畫的攻撃を實施しつつあるもの如く、遂に無道にも、經濟斷交の舉に出づるに至り、凡そ交際關係に在らざる國家間に於ける經濟斷交は、武力に依る挑戦に比すべき對行爲にして、對する種族の激進なる異質を以て、世界平和の基調に挑戦し、新秩序の建設に邁進するの決意は、益々鞏固たるものあり、而して、今次帝國が南方諸地域に對し、新行動を起すの仕ひを得ざるに至る、何等その仕民に對し、敵意を有するものにあらず、只英の暴政を排除して東亞を明朗本然の姿に復すを期すべしを信じて疑はざるものなり、今や皇國の隆替、東亞の輿府は此の一舉に懸れり、全國民は今次征戰の淵源と使命とに深く思を致し、苟も驕ることなく、又忠る事なく、克く竭し、克く耐へ、以て我等祖先の遺風を顯彰し、難關に逢ふや必ず國家興隆の基を奠し、我等祖先の赫赫たる史蹟を仰ぎ、雄渾恢遠なる皇旗の飄揚に萬歳喊なきを誓ひ、進んで征戰の目的を完遂し、以て華軍を永遠に安んじ奉らば、此の期せざるべからず。